

「珍頑鼠育草」の鼠はマウスかラットかネズミか

芹川忠夫（京都大学院・医・動物実験施設）

「珍頑鼠育草」は、天明 7 年（1787 年）に京都の銭屋長兵衛が出版元で発行された江戸時代の鼠愛好家向けの小冊子です。序の終わりに、定延子という名前が記載されているので著者ではないかと思われそうですが、さだかではありません。この本については多くの研究者によって紹介されていますので、すでによくご存知の方は多いと思います。私が、今回この本を取り上げるのは、紹介されている鼠はマウスではなくてラットではないだろうかと思うからです。京都帝国大の Mitoshi Tokuda は、1935 年、*The Journal of Heredity* 26(12):480-484 に *An Eighteen Century Japanese Guide-Book on Mouse-Breeding* という論文タイトルで、「珍頑鼠育草」を *The breeding of curious varieties of the mouse* として世に紹介しています。それゆえ、ラットというキーワードで論文の検索をしても、この貴重な本が世界のラット研究者の目に触れないでいました。そこで、去る 10 月 8 日から 11 日にかけて開催しました第 14 回国際ラット遺伝システムワークショップにおいて、この本を紹介しました。登場する鼠の毛色とそのパターン及び眼の色の記述と絵はありますが、鼠のサイズが数値で表示されていません。耳の大きさや体型、子供の手のひらの上でおとなしく扱われている鼠の絵からすると、私にはどうしてもラットに見えますが、ラットであると断定的なことは申せません。しかし、マウスであると断定することも少し無理があるように思われます。そこで、ある程度の偏見を敢えてもって、ラットである可能性を探ってみました。「白鼠のはじまり」の章において、黒目の白鼠を大黒天のつかわしめと呼ぶことが紹介されています。実験用のラットは、我が国ではダイコクネズミと呼ばれていたことは、ご存知のとおりです。それゆえ、この本に登場する黒目の白鼠はラットである方が自然のように思えます。頭ぶち、月日の熊といった毛色パターンは、Castle and Philip (1914 年) の hooded 毛色の研究に示されたものと違いがありません。熊ぶちは、確かにマウスにおける毛色パターンに、より一層合致するとは思いますが、その熊ぶちも黒目の白鼠も英国や米国の鼠愛好家のコレクションに登場します。豆ぶちという鼠は、これまで矮小マウスのことと紹介されていましたが、これがマウスなのかも知れません。黄檗山万福寺の開祖、隠元禅師のペットとして共に承応 3 年（1654 年）の秋にやってきた大黒鼠は、江戸時代の鼠愛好家の中で広まり、一部は西欧へもたらされたのかも知れません。実験用ラット系統のあるものは、このルーツに由来するものがあり、我が国には、実験用ラットの系統として逆輸入されたものがあるかも知れません。実験用のラット系統、ペットとして維持されているラット系統のゲノム解析により、このような仮説を証明することができるかも知れません。ヒトのモデルとしてマウスとラットを共に用いた遺伝子機能研究の場において、両者を包めて使える *Nezumi* という語は、便利なキーワードになりえます。江戸時代に栄えた我が国の鼠文化の流れが、現代のバイオメディカルサイエンスに貢献していると思うと楽しいものです。